

(別紙2)

審査結果の要旨

氏名 針原 素子

本論文は、日本人の謙遜傾向を自己卑下的自己呈示としてとらえ、その発生理由を説明するモデルを構成したものである。具体的には、社会的なネットワークへの適応という視点から、日本人の自己卑下的自己呈示が、日本に特徴的なネットワークにおいては適応的であるということを示している。

まず、第1章および第2章では、これまでの研究が概観され、その中で上記のアプローチが必要なことが説得力をもって議論されている。そして、第3章において、社会的交換理論の視点から、自己呈示という行為を、相手に対して、自分の持つ資源の交換価値がどれくらいであるかを示すものと考えられることを論じている。そして、呈示者 i の持つ資源 I_i の j にとっての実際の交換価値 $V_j(I_i)$ よりも、 i の呈示した価値 $V^{pi}(I_i)$ が低いとき、それを自己卑下呈示として定義できることを主張し、 i の呈示した価値 $V^{pi}(I_i)$ のほうが高いとき、それを自己高揚呈示であると定義する。この定義に基づいて、自己卑下呈示・自己高揚呈示の効用を次のように指摘した。(1)一回一回の交換においては、自己高揚呈示者のほうが、自己卑下呈示者よりも有利な交換比で交換を行うことができるが、(2)相手が交換相手を選択することができると考えれば、相手に有利な交換を行う自己卑下呈示者のほうが、自己高揚呈示者よりも相手に選ばれやすい。しかし、呈示者 i の資源の実際の交換価値 $V_j(I_i)$ が相手に知られていない場合には、高い価値 $V^{pi}(I_i)$ を呈示したほうが、実際の価値 $V_j(I_i)$ も高い可能性が高く見積もられるため、(3)未知の相手には、自己高揚呈示者のほうが、自己卑下呈示者よりも交換相手に選ばれやすい。

第4章では、自己卑下的自己呈示の定義が実際の自己呈示と矛盾がないことを示している(研究 1-4)。その上で、第5章では、社会によるネットワーク構造の違いは所与とした上で立てた理論予測を、エージェント・ベースト・モデルのコンピュータ・シミュレーション(研究 5,6)およびランダムサンプリングに基づく郵送調査(研究 7)によって検討し、モデルの妥当性を確認した。さらに、第6章では、それまで所与としていたネットワーク構造の生成過程も組み込んだモデルを構築し、同様の手法でその妥当性を確認した(研究 7,8)。以上の結果に基づき、日本人が自己卑下呈示を行うのは日本人が近隣集団内部で多くの交換を行い、評判伝達範囲に比して潜在的取引範囲が狭いネットワークを持っているためであるという回答を提出している。

以上、本論文は日本人の謙遜傾向を数理モデルで説明しようとする極めて意欲的なものであり、日本人の対人関係についての研究の進歩に大きな貢献をするものである。よって、本審査委員会は本論文が博士(社会心理学)の学位に値するものと判断する。